

審議会答申に思う

R.M氏が先回述べられた「高校生が学習すべき範囲と順序」に関する指摘はまさに正しいと考える。頭脳の感受性が豊かな十代に幅広く基幹分野を学ぶことで知的素養はもっともたやすく養われる。個々人の分野の選択はそのさきにあるべきで、広い基盤を持たない選択は先細りすること疑いない。

ところで、課程審答申を一読したが、理科の必修は、理科基礎（何？）・理科総合A（物理化学的？）・理科総合B（生物地学的？）のうちから1科目（単位2）および、この3科と物理1・化学1・生物1・地学1の7科目のうちから1科目（後者4科目は単位3）、の計2科目（計4-5単位）であると、理解した。わたしは基礎・総合A・同B・個別4科の具体的内容レベルを知らないからの外れかもしれないが、この必修は物理化学と生物地学とに理科を二分したことになるのだろうか。基礎・総合の1科目にくわえて個別1科目とは、四断してしまうようにも思える。総合AとBを学習すれば素養として十分というなら付け加えて個別科を学習しなくてもよいはずだし、十分ではないから個別科を加えるというなら選んだ個別科しか素養のレベルに到達しないことになる。この必修は普通科・専門学科・総合学科に共通、すなわち全高校生の素養の底であるが、どうして総合A+B（計4単位）ではいけないのだろうか。個別科（1科3単位）のほうが総合よりレベルが高いなら、しかるべき大学進学を目指すばあい総合を省いて個別科4科（均等なら12単位にもなるが、均等でなくてよい）を必修とする方が理にかなうように思える。つまりは必修は総合A・Bと個別4科の選択制にできないか。そうすれば大学教育を受けるに足りた素養のものだけが進学できることになる（教えるに足らない者に教えるのは徒労）。順序として総合の後でしか個別科が学習できないなら、一律総合A・Bを必修とするのが素養にかなう。総合が個別知識をもとにした関連付けなら、順序は逆になるが、そうだと基礎・総合1科と個別1科を必修としたわけが分からない。高校卒業標準履修単位74なので必修を増す分選択が減ることになるから、他の教科とのレベルの整合を必要とするが、幅広くあってこそ素養であり、そして素養は養わねばならない。もしかして、素養を低いレベルにしか求められない程にわが国がなっているのなら、課程審の必修プランは現状の追認である。低く設定しなければならぬような現状を打破しようとしているなら、国語と数学の必修をそれぞれ2単位にとどめていることも怪訝である（小から中へと数学の授業時間数が逡減してゆくが数学を演算計算としか考えていないようだ）。わたしは国語と数学が知力の根幹と思うから、素養を底上げするにはこの2科目にもっと力を注ぐべきと考える。指摘されたように、理科教員の現状ではこの上には手だてがないというなら、まさにわが国の悪循環の表徴

といえる。これは高校理科教員に限らない。大学でも同様、親子でも同様。だからこそ素養のレベルアップを目指すべきである。

中教審（地方行政）答申や大学審議会の中間まとめに目を通すと、そこで指摘された欠陥は事実ではある。だが、今日の惨状に今さら気づいて校長や教官の自主性・意識改革を求めても、言葉では人格は変わらないし実力が向上するわけでもないうえに、その惨状の一部でさえあるのだから実効性はないだろう。小中高大のレベルは順繰りに下がった。大学で高校補修を必要とするどころか、国家試験を経た医師に大学の補修を逼迫した現実診療のさなかに行っているのが現実であるが、わたしはこれを出血「サービス」とは思っていない。わたしの目が学会や論文に向いているなら確かに出血「サービス」であるが、臨床医学診療の直中にいて、補修しないと現実診療が立ち行かないから補修をしている。だからといって出血サービスを個人一般に求めはしない。大学が送り出し国家が資格を与えたレベルの矯正を個人に求めたところで埒はあかない。

今日の惨状を元へ元へとたどって考えると、大学から小学、そしてついに家庭へと行き着く。その家庭も学校教育を受けたもので築かれている。だからわが国の人間的素養を高めるためには、小学から始まる学校教育の連鎖を積み上げねば、と考える。教員・教官の増数について言えば、単なる増数は悪循環を絶つ糸口にはならない。数を増せば全体レベルが下がることは、医学校の増数がどれほど医師のレベルを下げているかを見れば明瞭である。良好な待遇（今は違う）を頼みにした厳しい資格審査を前提とした増数でないと意味はない。悪循環を良循環に切り替えることは、疾患を治療するように多くの要素を一挙に投入しないと成就しない。中教審が幼児教育で説いていることは尤もであるが、たとえ言葉で分かったような気がしても、人格は元のままだから具体的日常ではどうしてよいか分からず、親は説かれたようには子を育てることはできない。あえて主張し行動すると周囲との摩擦だけが残るだろう。教員・教官についても同様ではないかと危惧する。意識の変革は、書類の文章ではなく圧倒的な実力を背景にした個々の人間同士の関わりに中からしか生まれない。だから悪循環を切る社会的制度的な手だては学校教育しかない。したがってせめても1：機械的に順序正しく学習できるようにカリキュラムを創ること、を第一とし、その上に、次世代が育つまでの当面は2：教育を「サービス」とすることのないよう教官に報酬を与えること、そうやって育った次世代では可能になってほしいが3：これまでとは違う種類の人物を教職に選抜する仕組みを創ること、が鍵と考えるが、はたしてわが国にその社会的力量があるのか、明るい先が見えない。

（高等教育フォーラム 1998.9.28）